

家富み榮へて居ります此方は夫に引替へ親子二人露の命を繋ぎ兼ね
 殊に當時母の病氣介抱の手當がございませんから街道へ出まして人
 足となり追ひ廻しに使はれて僅かに露命を繋いで居るは實に果敢な
 き事でムいます其年の九月十一日人足で小金吾と云ふも可笑しうご
 ざいますから金五郎と名前を變へて古半纏に繩の帶息杖一本突て來
 掛ると向うから三枝勘解由と印しの付た荷物がチヨイ／＼見へます
 是れは上の御用で市ヶ谷御上屋敷へ罷り越すので是を小金吾が見て
 少ア、情けない事だ同じ劔道指南役を勤めた身、諺にも喧嘩兩成
 敗相討となつて父は其の場に倒れ勘解由は僅かに存命して吾家の門

口まで往た迎其家はお立なされ吾家はお取潰しになり其の無念く
 が固まつて遂に母は病氣となり現在敵が此處ろを通るのを武門の家
 に生れた此の身今年既に十八歳身は賤しき下郎になりても心までは
 下郎に成らん何卒致して三枝勘解由を討取て兩親の無念を晴したい
 ものと小金吾は狂氣の如くに三枝を討果さんと思へども何分にも得
 物がなくどうかいたして刃物が欲しい者だと云つて眞逆出齒庖丁や
 刺刀位いで討たれず向ふも尾州の指南番假令此方の腕前が勝れて
 居ても刃物がなくては敵は討たれず如何はせん。」
 と思ふ折しも丁度向ふに富士見と云ふ茶屋がございました其の茶屋

に供を連れて若い侍が一人腰を掛けて居りましたから夫へ參つて大地へ兩手を突つて小金吾は

少「扱折入てお願がございませすが私しは尾州名古屋の家來櫻井小金吾政晴と申する者只今父の敵元同藩でございませした三枝勘解由と申するもの、忤、此の處ろを通り掛りますでございませすが刃物が無つては敵を討取事叶はず最早程なし此松原へ差掛るでございませうが肝腎の刃物が無つては致し方なく何卒貴公様の御差添を拜借致し度詐りは毛頭申しません此の松原に於て討合まする事故どうぞ武士の情と思召してお差添をお貸し下され度。」

と涙を流して申入れました、此の侍は何者か後年大鹽平八郎と云つて大坂吟味與力を勤め高名の者でございませす右人足の頼みを聞いて暫らく顔を守り

平「ア、尤もな事だ敵を討つとあらば小劍を貸すも大劍を貸すも劍を貸すに至つては同じ事小劍を貸して萬に一仕損じたと思はれては貸し與へたる當人も無念故刀を貸して進せる程に是にて本望遂げられよ。」

少「エ、有難う存じます本望遂げた其上で厚く御禮申上ます。」

平「併しお急きなさるな急いては事を仕損ずる故能く沈着て事を果

されよ。」

小「委細承知 仕りました。」

と刀を借りた儘彼方を指して駆行ました大鹽の仲間

仲「旦那街道の胡麻の蠅など、云ふ者は旨ひ事を致しますな。」

平「何を。」

仲「何をたつて彼んな汚ない装をして貴君がお情け深い御氣性の烈しい事を何處から聞き出して來て敵を討つから脇差を貸して呉れと嘘を云ふのを脇差では不可んから刀を持って行けと彼んな宜いお刀を取られて仕舞うと云ふのはお利口な様でも其處はまだ御苦勞が足り

ませんねへ。」

平「馬鹿を云へ下郎の了簡では然う思ふであらうがお願い申すといつて彼が眼中に涙を浮め決心致した様子、夫故貸して遣はした見よ、今に仇討があるから。」

と云ふ中向ふから致して一挺の輿物來りしが彼の人足は何處に隠れて居るか、と四邊を見廻して居ると丁度輿物が松原の真中の處ろへ來たかと思ふと稻叢の影より現はれ出し最前の人足大音を上げ

小「ヤア、珍らしや三枝勘解由前名重太郎斯く申す某しは櫻井金吾が一子同姓小金吾政晴我父と汝の父と相討なるに櫻井の家は潰し

三枝の家をお立置とは情けなや片手落しのお計い父の無念は幾許なるぞサア尋常に立出で、勝負を致せ。」
輿物の中にて聞かれた勘解由家來共がバラ／＼と立かゝらうとする故

勘待て……稀らしや小金吾殿言はれた處ろ尤も至極サア尋常に勝負致す故御卑怯を働らき召さるゝなよ家來共駕籠の戸引け。」
と籠駕の戸引かして立出たるは當年二十三歳三枝勘解由景憲紺純子の野袴黒羅紗の裂羽織家來に持たせし槍を取り出し

勘家來共何の様に主人の身に危うき事があるとも決して出ては相

成らん先方は斯く淺間しき下郎姿某しは大勢の家來を連れたるよ
り家來に助太刀致さるゝとは武士の耻辱手出しはならんぞ。」

家「委細承知仕つりましてございます。」

大鹽平八郎是を見て

平「ア、適れどうだ傳助武士の目鏡と云ふものは違ふまい。」

傳「成る程恐れ入りました併し向ふは立派なお武家で強さうだが可
哀相に病身らしい人足が敵を討つと云ふナア難かしい彼りやア返り
討になりますぞ。」

平「延喜の悪い事を云ふな討も討たれもせん中に返り討など……」

……。」

双方は位取に及び暫らく睨みあつて居りましたが中々どうも小金吾の構へまだ年は十九か二十位のであるが凄まじい者故感心をして平八郎は見て居りましたが勘解由景憲と云ふ者は劍法ばかりではなく槍も宜く出来ませんが併しどうしても小金吾の方が急ぎ込んで居る様でございます向うは泰然として居ります處ろを見て

平「可哀相に彼りやア返り討だ返り討になるワイどうぞ致して助太刀をしてやりたい。」

と天保年間に其名を上げたる大鹽平八郎勝負如何にと息をこらして

見て居りました双方聲を上げヤツト突き出す勘解由が槍は電光石火アハヤ小金吾は突かれしかと思ひしにヒラリツと體を替し突き出す槍を右に開き左に開き向ふの呼吸の亂るゝを待て居る様すされど勘解由の槍術は中々熟練致して居る故容易に小金吾は手許へ飛び込まれん様子其中にどういふ途端かズツと突き出す勘解由の槍を受け損じ小金吾は股を一槍突かれましたからアツといつて夫へ倒れた直ぐに突くかと思ひしに勘解由が小金吾如き計らいに遇ひしならば吾又た此の小金吾を討たねばならん一槍突た上からは是にて濟まん、息の根止むるも不便の至りと少しく猶豫其の時に此方に立たる大鹽が

大音上げ

平「アイヤ此方のお武家足下の後ろに身構へ立たる者の御油断成さるゝな。」

勘「何。」

と思はず振り返つた勘解由もう一突突いて宜いと思つた氣の緩みか吾を忘れて後ろを向いた其の途端に得たりと小金吾踊り掛つて持たる槍を切り落としアツと云つて柄に手を掛けんとする間もあらせず一心凝つたる腕の冴へ、小手をバラリと切り落としヨロ／＼と踏めくを真向より唇まで物の美事に切り付けたれば血烟立てドウと倒れ

る忽ち上に乗掛つて充分に止めを刺して年來の鬱憤を茲に晴しました、是れより大鹽平八郎は小金吾を處ろの役人に預け尾州名古屋に参り事の次第を尾州の重役まで申入りました處ろ討たのも尾州の家來討たれたのも尾州の家來でありますから大鹽は喧嘩両成敗の論を説き小金吾の孝心なる事を重役まで申入れましたが流石は辨者、只今なれば辨護とも云ふべき其の辨護の立ちました故に茲に三枝の家は潰れ再び小金吾の家はお取立になりました、是れ大鹽平八郎一代記の内言葉の助太刀と云ふ今以て櫻井の家は尾州藩にございます、然るに惜しむ可し大鹽平八郎は天保年間に下民の爲めに力を盡くせ

す
しも天下の大法は犯すべからず遂に刑場の露と消へましてございま

日光彈脫輿物
にちくわうたまねのりもの

寛永の八年相州箱根の山中で徳川三代の將軍家光公の御輿物へ何
者か知れず鐵砲を打ちました然るに御運目出度其の彈先はお逃れに
相成りましたが三代の將軍家光公御輿物よりお立ち出で遊ばさせら
れて

家「大久保彦左衛門は何れに居る。」

と仰しやると

「ハッ。」

と答へて彦左衛門御前に兩手を突く

家「彦左衛門馬引け。」

彦「之れはしたり只今何者とも知れず上のお輿物へ鐵砲を打ちました其の弾先をお逃れ遊ばされ誠に御幸運の至り然るに御馬に召されて此所ろを御通行に相成りなば以前の曲者扱は打ち損じたかと再び君を覘い奉つり御尊體の危うきこと風前の燈に等し矢張御輿物か御歩行にて御越しあつて然るべき臣等一同上の前後を十重二十重に御守護仕り箱根を打ち越すでございませう。」

家「控へろ下郎の鐵砲に當るやうな不徳にして征夷大將軍の大任が

勤まると思ふか苦しうない。」

と仰しやりましたして夫より御馬に召されて箱根をお越しになると云ふ斯の如く御勇猛でございましたから天下をば十五代の間だお定め相成りましたしてございます、扱其の節箱根の山を隅から隅まで曲者の在所をば御穿鑿に相成りましたが其の行衛が分りません然る處ろ湖水の傍らに落してございましたは一挺の短筒プンと云ふ名香の香りが致しました夫れ故に將軍は砲術に精しき者を御前に召されお傍用人戸田山城守を以て

家「火藥の中に香を込める事があるか。」

とお尋ねに

出決して火薬の中へ香を込める事はございませぬが此の短筒に名香の馨りのございますのは名香所持なる者が常に肌身離さず持ち居りましたものにて香の移り香かと存じます名香所持の者を御穿鑿に相成れば恐れ多くも上様の尊體を目掛け箱根に於て鐵砲を打ちました者が相分りませう。」との答へ夫より日本六十餘州香と名の付ましたるものは伽羅は申すに及ばず人香、抹香、線香、五種香、萬能香、無二膏夫んなものはございませぬが残らず御穿鑿でございませぬが相分りませぬ然るに寛

永の八年九年十年十一年とお話しはございませぬ其の十一年に肥前國長崎に梅ヶ崎と申する所ろがございませぬ是れは至つて景色の美しい所ださうでございませぬ其の梅ヶ崎と云ふ所ろに水月と申す料理店がございませぬ先づ其の頃は長崎一の料理店で海上を一目に見下す風景は言語にも述べ難なき程でございませぬ其所へ折り柄冬至の祝いで長崎の唐物商藥種屋等が集會いたします(冬至は俗に漢の正月と申す)大凡五十七八名の商人が冬至會と申すのを致しまして丁度暮方に皆んな引き取りました其の中に美濃屋、近江屋、甲州屋と云ふ藥種屋唐物屋の主人が今日の世話役でございませぬ多勢の歸つた跡

で

三「イヤ先づ今日の冬至會も何事もなく済んで誠に目出度茲をマア奇麗に掃除をして吾々共三人改ためて杯一遣らう。」
 と残物は残らず形付け座敷を替へて夫から美濃屋、近江屋、甲州屋の三人が御酒を飲べ始めるとチラチラと雪が降て参りました
 近「どうだ斯う雪が附て來たのは有り難いな雪は豊年の貢といつて此の上も無い目出度い者だ冬至會の當日雪の降るのは又た來年も商賣繁昌大金が儲かるだらうよ。」

甲「マア先程から大變に皆んなの對手をしいくやつて居る處ろへ

又た今改ためて飲んだものだからスツカリ既酔ちまつた飯を食つて歸らうじやアねへか。」

美「左様く餘まり酒も深く飲むと仕舞には旨なくなる一寝りして又た飲むと飲めるが續けて飲むと酒の氣がなくなつて旨くないチイおさよさん。」

さよ「ハイ。」

美「飯を持って來て呉れ。」

さよ「ハイ畏まりました。」

といつておさよと云ふ女中が御飯を持ってまいりましたが長崎では其

の飯と云ふと三ツ椀でございます。汁椀に中椀に飯椀之れを三椀と申まして例へ三人のお客でも飯と云ふと次の間に火鉢を据へ夫へ鍋を掛けまして汁を盛ります夫れ故に酷暑の節にも汁は醒めません當節東京の料理店では何んなに寒氣の強い時でも下から汁を運びます概に二階屋が多うございますから下から持て参ります中には其の汁がさめます汁のさめた程不味いものはございませぬ、汁計りはもう熱い所が最上でございます扱三椀でございまして下婢共が飯をよそい汁をつけるると云時に近江屋と云ふ唐物屋は中々風流な男で狂歌が出来、本歌も出来、茶が出来ると云ふやうな利便な人物でございま

す

近美濃屋なんと末廣がりに此の三ツ椀での中の中椀で一杯飲まうおさよさん並々といいでお呉れ、ヲ、お仲さんも居たなお仲さんも半分ついでお呉れおさよさんとおなかさんが並んで来たから己が一番狂歌を讀まう。」

甲「近江屋、狂歌は有り難いなどういふのだ俺が書かう。」
と甲州屋と云ふ藥種屋の主人が筆を取りました時に
年を経てまた飲むべきと思ひさや

命なりけり小夜の中椀

美「成る程これは面白い夫じやア俺が一ツ讀まう。」
と美濃屋と云ふ唐物屋が

美「おさよ並々と注いでくれ。」

と汗碗をとつて並々と注がせ

紅葉せぬ常盤の山に住む鹿は

己れないてや秋を汗碗

近「是やア面白いどうも感心く〜ヲイ甲州屋お前の番だせ跡は飯碗
だ。」

甲「飯碗と云ふ歌はないな跡に残るやつは袋脊負といつて割が悪い

マア一番やつける。」

と飯碗に酒を並々とつがせて置いて末廣がりにグット一口に飲んだ

年の中に春はきにけり一歳を

去冬とや飯碗今年とや飯碗

美「甲州屋チツト骨が折るなモ一一つやつて見て呉れ。」

甲「年の中に春は來にけり一歳を去冬とや飯碗今年とや飯碗、飯と
いつちやア言へねへから飯の事を飯といつたんだ。」

近「アハ、ハアマア有難へ三人で斯うやつて面白い事を云ひ合う
のは誠に目出度夫れじやア一つめませう手を貸してお呉んなせい

チヨンくくくチヨンくくくチヨン。三人「ヤアお目出度う是れが世に云ふ和歌三人でなうて馬鹿三人と云ふのだらう。」

と云ふ途端に何處ともなく

○「此所にも一人菰の上人がいる。」

と云ふ聲が致しましたから

近「誰だ茲にも一人菰の上人が居るとは、おさよさんかおなかさんか。」

さよ「イ、エ。」

甲「ハテナ和歌三人でなうて馬鹿三人だと云ふ途端に茲にも一人菰の上人などは面白いハテナ。」

といながら甲州屋は窓を開けて見ると三國山と云ふ酒菰を有て奉納と染たる手拭にて頬を包み溜塗の剝げた麵桶で濁酒をグビリくと宜い機嫌で飲んで居るのは慥かに茲にも一人菰の上人と云つた人物に相違ないと思ふから甲州屋は

甲「オイ今茲にも一人菰の上人と云つたのはお前かへ。」

非「へい旦那様方が面白可笑しく遊んでおいで遊ばして和歌三人でなうて馬鹿三人だと仰しやられた故吾を忘れ爰にも菰の上人がとッ

イ申ましてございます。」

甲「こりやア面白い感心だお前は酒が飲めるか。」

非「澤山は頂だけませんが此の溜塗の麴桶で水を量つて見ると三合
ヅ、這入りますが是で五六杯引掛れば宜いんで。」

甲「夫じやア飲めねへんじやアねへ爰に飲み残りの酒があるから注
いで上るから麴桶をお出し。」

非「ハイ〜お手許は御面倒様や。」

甲「ナゼ然んな聲をするのだ。」

と上から溜塗の麴桶に注いでやる酒をグツと飲み

非「これが本統の音羽の瀧飲と云ふのでございます有難うございま
す御酒を頂だいた所ろで佐藤兄弟と云ふ洒落は何うです。」

甲「どういふ所ろの洒落だな。」

非「佐藤兄弟と云ふのは向ふ注飲、此方唯飲。」

甲「成る程此れは面白い美濃屋、近江屋一つお菰を呼んで飲み直し
はどうだへ。」

美「夫れは面白いおさよお菰を呼んで呉れ。」

さよ「マア貴方お止しなさいお菰なんぞ呼んでどうするのです。」

甲「マア宜いから呼んで呉れ。」

と夫れから又々御酒が始まりお菰は切戸を開らきましてゾロ／＼菰を引き摺りながら這入て來ました

甲「サア／＼一杯飲みな是れお菰に注いでやれ。」

と云ふと女中はボン／＼怒りこんな汚ないお菰を呼んで何うするの
かと思ひましたか仕方がない酒を注いでやると

非「旦那様世の中に酒程結構なものはございません寒を避け暑さを
避け悪るい病いをさけると云ふので酒と云ふのではないかと私しは
思います。」

甲「えらい／＼酒と云ふのは其の邊からいひ出したんだらうね酒飲

めばいつも心が春めきて借金取りも鶯の聲、酒程目出度ものはない
テな。」

非「時に旦那様最前貴君方が焚いておいで遊ばした香アノ名香の馨
りを嗅いで吾を忘れて御酒を頂戴して居りました所ろで聲をお掛け
下さいましたか彼の香がございますなればお手許は御面倒様でござ
いますかどうか一つ焚いて嗅がして下さる譯には参りませんか。」

美「イヤお菰が香を嗅ぐと云ふのは面白い焚いて遣るから嗅ぎなさ
るが宜い。」

非「旦那様私しも一つ香を焚きませう。」

美「へーエお前が香を持って居るかへ。」

非「お菰はして居りましても爰で焚く位ゐの香は持て居ります。」

と頓て懐中から取り出した香盤の上に載せたるは太閤殿下秀吉公

より石田治部少輔へ下され佐竹の家老車丹波守へ下されたる伽羅の

名香富士の朝、其の香り馥郁然として鼻を劈く計り美濃屋、近江屋

甲州屋はこれはいくくと驚ろく中に何思ひけんお菰は何れへか立ち去

つて行ました

甲「ハテナどうも彼のお菰は只者じやアない扱は箱根の山中で將軍

家へ對して鐵砲を打た曲者は彼の者に相違ないと早々長崎奉行へ訴

たへたが宜いと三人相談の上時の長崎奉行神尾備前守殿へ訴へ出で

たるによつて長崎の口々を固めました、然る所ろ長崎の梅ヶ崎に天

神林といつて天神の祠がございます其祠の前の蒲鉾小屋の中でゴ

ーと云ふ大賄がいたしますから何でも怪しい乞食に相違ないと長

崎の奉行より致して捕方が掛りました

捕「お菰やお菰や。」

非「へい。」

捕「お菰や。」

非「へい何んでございます。」

「今葬式の歸りだが赤飯と錢を遣るから手を出せ。」

「非、ハイ有り難う存じますお葬式の歸りで赤飯と錢を下さるとは有難う存じます待てば甘露の日和とやら。」

と菰垂の中からノソノソと出て来て手を出すから二十五兩包みを其の手の平に載せるのかと思ひの外腕ツ首を取りて

捕御用だ。」

と云ふからヨロ／＼と非人が小屋の中から半身顯はしたのを

捕御用だ。」

と云つて繩掛けやうとするのを非人は彼方此方へ投げ散し裏ろから

又一人御用と組付のを體を捻つて脇腹を強く突きましたからウーン

と云つて倒れる前から来る奴を蹴返し又一人十手をば振り上げて來

る奴の利腕を取てズシンと打たる故アツと言つて十手をば大地へ落

す早くも是を奪い取て後から来る奴を打ち退け打ち退け烈しき働

を致しましたが追々人数も加はりまして遂に大勢の爲に敵し難く繩

目に掛られましたてございます、直様其の小屋の中を取り調べます

と正宗の短刀、千鳥形の數品が出でましたから是れを添へて長崎奉

行の役宅に引かせて參り白洲を立て調べました所ろ何を尋ねても右

の非人は兩眼を閉じ口を噤んでプツツリとも答へない、神尾備前守

殿御聲高く

備「汝は啞か聾か斯迄尋ぬるに答へを致さざるは其意を得ず。」
と云ふ時靜かに兩眼を開いて

非黙れ備前、千鳥形の香包み、伽羅の名香富士の朝、正宗の短刀
七九の桐の紋散し云はずと知れたる其の姓名は汝も大方推したであ
らう草深き肥前の長崎邊りで本名を名乗るやうな者ではない早々江
戸表へ差送れ松平伊豆守は今楠日本の孔明と承たまはる伊豆の調
べを受けて本名を明す肥前頭が高い。」

と之れでは何方が調べるのだから分らない夫から據るなく早々江戸表

へ差立ると云ふことになり之れから江戸表へ差立になると水野美濃
守殿へお預け、黄道を撰んで芝の金智院承天長老の記録所へ白洲を
立て長崎に於てお召取りの非人のお調べ忝けなくも徳川三代家光公
は御簾中に着座左右に並ぶ徳川の家來左ながら綺羅星の如くであり
ますお掛り松平伊豆守殿は將軍家へ御禮、伊井掃部頭様、土井大炊
頭様、酒井讃岐守様等へ御會釋でございます、お席をズーツと御進
みに相成り

伊「是れ肥前長崎にて召取に相成りし非人、千鳥形の香包み、伽羅
の名香富士の朝、是れを所持するからには豊臣縁故の者であらうな

時に寛永九年の九月二十三日相州箱根の山中にて恐れ多くも將軍家の御輿物に鐵砲を打た者があるが其の節草を分けて穿鑿に及ぶと雖ども一向に右の曲者の行方は知れず察する所る其方上様の御輿物に鐵砲を打たに相違あるまいな、どうじや汝千鳥形の香包み伽羅の名香等を所持するは之れ即ち豊臣縁故の者と覺へたり石田の殘黨なるか小西の餘類なるか速やかに白狀いたせ。」

此時彼の非人は靜かに兩眼を開き松平伊豆守をハツタと睨んで

「非黙れ伊豆汝非人非人と賤しめるが大丈夫の侍が國家の爲に非人になるは稀しからず、松平伊豆守信綱は日本の孔明、今楠と承まは

り之が調べを受けて本名を名乗らんと樂みに來る甲斐もなく見ると聞くとは天地の相違侍を調ふる法を知らざる其の方が調べを受けて白狀いたす者にあらず、御簾の中に控へたるは徳川三代將軍家光ならん、家光の調べを受けて本名を名乗らん、伊豆頭が高い。」

伊豆様は御年が若いから之をお聞きなるとハツとお急ぎなされ

伊「コレ非人々々と言れたるが残念なれば何故非人でなく其の方は繩に掛らん非人の姿で繩に懸つにたよつて非人の調べをいたす汝が本名を名乗り而して侍分以上の取扱いをいたさんければ其の節は恨め、見る影もなき非人故非人々々と言つたるは之れ調べの法方であ

る。」

非「黙れ伊豆大丈夫の侍が假に非人の姿を爲すは珍らしからず、唐土の豫讓に於ては面てに漆を塗り悪鳥を食つて姿を替へ趙昌子の衣を裂いたと承まはる吾朝に於ては宿禰兼道非人となつて大友の眞鳥を刺し、又々景清は兩眼あるが故に頼朝を恨むといつて眼を繰り抜き肥後國岡田の莊に跡を垂る、さすれば大丈夫の侍が非人に姿を替ゆる事は稀らしからず、徳川三代將軍家光の調べを受けてこそ吾が本名を名乗らん。」

と呼はつたる有様は實に天下の豪傑とこそ見受けたり之れを聞かれ

伊豆守殿大いに怒り

伊「然らば水火の拷問をかけ其の本名を名乗らせ呉れんと呼ばはつたり、此の時正面なる御簾の中にて三代將軍家光公は御聲高く

家「控へろ伊豆、吾が自身に調べるであらう。」

と御簾がズツと上る

家「大久保彦左衛門吟味の道具之へ。」

彦「心得ましてござります。」

と白木の臺を其の處ろへ持參に及ぶと將軍家光公御自身のお召しの袖をピリ／＼と引き裂き二つに疊んで臺の上へ載せ、又御手許の

白扇へ忠孝義と三字をお認めに相成り墨の乾くを待て是を疊み

家「彼れへく。」

と云ふお言葉仰せに従がい非人の前へかき据へる

家「小手を緩めて得させい。」

との仰せ彦左衛門非人の手を緩めます、非人は臺の上に載つたる扇子上様御自身にお書きの様子に承知いたせし故開いて見ると忠孝義と云ふ三字豊臣秀吉に對しては忠、實父三成に對しては孝なり、佐竹の家來車丹波へ養子に往た以上は車の家へ義を立たと云ふ思召にて忠孝義と云ふ文字を扇子に書いて下されました右の非人は涙を流

し

非「エーエ御眼力には恐れ入りましてございます晋の豫讓の例に倣

い君の片袖を賜はりし故是にて私しの志しは遂げました斯る聰明英

智の君に鐵砲の筒先を向けたる段は返す返すも恐れ多し何を隠さん

某しは石田治部少輔三成の一子幼名光丸、佐竹の家老車丹波へ養子

となり車丹波正虎、父は常陸の太田の城にて討たれ私しは家來に連

れられて本國を立退き大阪へ入城に及んで秀頼公の御諱の一字を賜

はつて丹波守秀虎と名乗り平野地藏堂焼討の節多くの敵に支へられ

入城叶はず遂に非人と姿を替へ世の動靜を伺はん爲め武藏國大塚日

蓮寺の邊りなる非人頭善六の許に足を留め其の後相州函根の山中で將軍家の御輿物へ鐵砲を打ちしに相違ございません何卒御處刑のほどを願いたうございます、三代公聞し召され

家「我が眼力に違はず秀頼に忠、三成に孝、丹波に義を全からしむ眞の武士、其罪を悪んで其の人を悪まず、一命は助け遣はすゆる今日より改ためて家光が家來となり忠義を盡くせ。」

仰せにはつと丹波守ハラ〜と涙を流し

丹「實に有難き御仁言、心根に徹し候、去りながら此後將軍家へ對し不敬を加へ候者有之時は丹波を以て例となさるや、天下の大法は

亂すべからず、速やかに御處刑を願ひ奉つる。」

と此一言に三代將軍是非に及ばず切腹仰せ附らる

丹「斯る大罪人を侍の御會釋にて切腹仰附らる、段難有仕合せに存じ奉つりまする。」

家「併し丹波何か申置たき事あらば申せ聞届け得さするぞよ。」

丹「重ね〜の情の御言葉仰せに甘へ言上仕つります、大塚の日蓮寺門前非人頭善六の許に忍びし節娘なみと申する者に病中の介抱を得て赤面ながら二人の中に二人の子を擧げました一人は男子一人は女子、是は丹波の子なりと御處刑有之こそ然るべきに候へばも何卒

格別の御慈悲を以て兩人の一命は御助け下され度し。」

と流石に猛き武士も子ゆるの涙ハラ／＼、三代公聞召され

家「如何にも承知致した必らず心配致すな二人の子供は宜きに取り

立て遣はずぞ。」

丹「有難き仕合せに存じまする。」

扱丹波守は物の見事に切腹いたし享年四十三才を一期として茲に亡

命、三代公非人頭の善六親子をお呼び出だとなり、二人の子供の内

一人は佐竹様へ御貫ひ取りになり總領の男の子は關東八州關外六

ヶ國非人頭淺草溜御預りと相成し車善七と申されました、日光彈拔

輿物の由來は是でございます

碓氷の紅葉

君子は三思一言と申して三度考へて一度口を聞くと云ふ實に口は謹しんで聞くべきものでございます

口あけば五臓の見へるあけびかな

風鈴や餘り鳴るのもかしましい

吉田の兼好は眠るは智なり笑ふは愚なりと言はれました實に一言より大間違を引き出します事がございます、茲に信州松本の御城主松平丹波守殿(戸田姓でございませう)時に文化の年間江戸表へ御参勤

の節碓氷峠の半腹にお輿物をお下し成され四方の景色を御覧なされました

碓氷とは誰が言初し濃き紅葉

ありし昔の秋に問ばや

とございます、實に四方山の紅葉染めいだせしは宛然錦を織り掛けたるが如く此の折柄麓の方より節面白氣に謠ひ來りし者あり、謠ひでもなし、經文を唱うるでもなしハテ合點の行かぬ事と耳歇だて、聞いて居ると淨瑠璃節にして中々面白く語り來ります故御家來を召され

丹「之れく、何者が謠ひ來りしか見て參れ。」

家「畏まりましたてございまする。」

と駈け出し之れを見て取て返し

家「武家體の者が兩人謠ひ參りました。」

丹「アー左様か……道中の事だによつて長旅の憂を晴さん爲謠ひ

來りし者と見へる予も旅の徒然を慰さめる爲め彼の者を呼び留めて

一節承はるであらう早々罷り越して其の者を兩人是れへ呼べ。」

家「畏まりてございます。」

と頓て其處へ來りました者を見ると一人は二十二三の侍一人は二十

八九と思しき者でございます、身分の低い者と見へ装束の造らへも

粗末でございます、扱其者をお駕籠にへお呼び寄せになりました

丹「此の方は松平丹波であるが其方共は何れの家來に致して名は何

と申する者だ。」

侍「へい私共は同國上田の城主松平伊賀守家來尾上久藏、中村大

助と申す者でございます。」

丹「今兩名が謠ひ來つたは近年下方で流行する淨瑠璃節と云へるも

の、やうに思へるが中々聲柄も宜し面白可笑しく聞へし故一節是に

て所望いたしたい。」

侍「是は恐れ入りました眞平御免を蒙りたう存じます。」

丹「イヤ、決して心配するな互ひに道中の事故苦しい謠はれるやうに。」

と強ての御沙汰故兩名は

兩人「左様ならば後日御沙汰は御免を願ひたうございます。」

丹「決して心配ない。」

との仰せゆへ兩人も茲を先途と關の戸の幻か何かやりました

丹「ア、感服いたしました是は些少だがホンの酒代である。」

とお目錄を下さいました、兩人は有難く頂戴をいたし

兩人「左様ならば是にて一抔頂戴いたします。」

丹「ア、左様致すが宜い。」

是より兩人は御前を退ぞいて

大「どうだへこう尾上侍を止めて江戸へ往て太夫にならうぢやアないか。」

久「巫戯るな太夫殿か今の殿様が話はせんと仰しやつたがどんなお話の序に一寸仰しやるまいものでもないさうしたらばどうする。」

大「其時は仕方がないから互ひに浪人をしてどうか又工風もあるだらう。」

と夫より丹波様は江戸表へお越しになり兩名は上田へ立ち歸りましてございます、其の後何方も御帝鑑のお詰めでございますが詰合中退屈の餘り四方山のお話し中

伊「扱どうも秋は碓氷の紅葉は美しい事でござる拙者等も碓氷の紅葉を兩度程見ましたが高尾の紅葉と云ふ事は申ますが高尾から見ると碓氷の方が美事だ。」

と云ふ事を云はれましたから丹波守

丹「碓氷と云へば尊公様の御家來が……。」

と言ひ掛けハツト氣が付き御自分もア、悪い事を云ひ出したと思つ

たから其儘口を閉ぢると伊賀様は

伊「私しの家來が何か松本殿に對して不禮でもありましたか。」

丹「イヤ不禮は致さんが仲々ゑらい者で。」

伊「へエー何をお譽めに預かる事を致しましたか伺ひたうございます。」

丹「然れば其の碓氷の話しが出ましたからフト貴公の御家來を譽めましたか丁度三年跡參勤の節碓氷峠の羽根石の處へ掛りましたのは九月でありましたどうも谷々の間だに染めましたる紅葉、峯の間に染みました紅葉の餘り奇麗でございましたから暫らく輿物を止めて

景色を眺め居ります處ろへ一疋の手負猪が山間から飛び出し某しに
隨いて居りました供方の者も是を討ち留めんと致しますうち突然兩
名の侍現れて右の猪を討ち留めましたがイヤどうも其の早術は適
れの者でございしました故何れの者に候かと尋ますると上田の城主松
平伊賀守の家來だと斯う申しましてございます。」
伊「ア、夫はく何と申する者でございますか松本殿にはお覺へて
ございますか。」

丹「如何にも存じ居ります尾上久藏、中村大助と申しました。」

伊「へ、エ手前そういふ家來を存じませんが。」

丹「イヤ餘程身分の低いやうに承知いたしたから貴公は御存知ない
かも知れん慥かに御家來は御家來に相違ない。」

伊「ア、左様でございますか是は又たお話を承はつて手前も満足
でござる。」

同席の方々も

○「上田様は御家來の嗜みが宜いから末の家來まで猪を殺す程の適
れな者がござるな。」

と夫から伊賀守殿はお屋敷へお歸りになつて早速御家來を呼び出し

伊「是れく家來共。」

「案へい。」

伊予が家來に尾上久藏、中村大助と云ふ者があるか。」

案「中村大助、尾上久藏と云ふ者は侍分以上にはございませぬ。」

伊「イヤ侍分の中にはあるまいが至つて身分の低い者だと云ふから

足輕の中にでもありはせんか調べて見よ。」

案「畏まりました。」

と夫より足輕の組々を調べますると落合三郎兵衛と云ふ人の組下に

尾上久藏、中村大助と云ふ者がございます

伊「其の落合の組下久藏、大助と云ふ者を庭前に呼べ。」

と仰せられたから早速大助、久藏に云ひ聞すると兩人は青くなつて
仕舞つて

大「夫だから屹度祟りがあるだらうと思つた唄を謠つて酒を呑んだ
時は宜い心持だつたが宜い跡は悪いと唐人は云ふが成程違へねへ切
腹でも仰せ付られるのか夫とも追放はれるものか俺もそうだらうと
思ふ。」

と兩人恐るゝ伊賀守様の御前へ罷り出づると
伊「苦しうない目通免す。」

「人へい。」

と兩人はお手討になりはせぬかとブル／＼震へながら、椽側へ恐る／＼罷りますると

伊「尾上久藏、中村大助と云ふは其の方共か。」

兩人「へ、ツ尊命の通りでございます。」

伊「三年前九月の末同國松本の城主松平丹波守が參勤の折から碓氷峠の羽根石と云ふ處ろに於て猪を退じて功を現はしたと云ふがどうじゃ。」

功を現はしたと云ふところの話ぢやアないぞうしたら宜らうと兩人も是には困りました

伊「功を現はしたならば夫と速やかに申せ猪を退治いたしましたと云ふがどうじゃ。」

兩人「へエ。」

猪を退治したと云へば必らず詐りを申したと云ふので取て押へやうと云ふ城主の御了見に違ひない是は正直に言つた方が宜いだらうと思ひましたから

大「恐れながら斯る山路の關の戸で……………」

伊「碓氷峠は關東搦め手の關、其に斯る山路の關の戸で猪を退治いたしましたと云ふのか。」

と云ふ仰せ故、どうでお暇になるなら猪を退治たといつた方が宜らうと思つて居ると

伊「何故其の方共夫程の功を三年の間誰にも話をいたさんで包み居つたか併し功名と云ふものは人が自慢話をするものだが云はないと云ふのは又一段感服いたしたどういふ次第で猪を退治たか速やかに夫を申せ。」

大「へッ尾上お前は中々辨口が宜いから旨くやつて呉れ。」

久「俺ア不可ない。」

伊「是れ〜兩名の中何方にても宜いから速やかに猪退治をしたこ

とを申立る。」

久「左様ならば久藏申上げますがどうかお湯を一杯頂戴。」

大「何だへ尾上お湯なんぞいるもんか講釋師染て。」

久「マア宜い、エヘン〜。」

大「何だ夫んな真似をしなさんな。」

久「碓氷峠の半腹に掛りし折から一疋の猪飛び出したり此の時丹波守殿の御家來衆左右にワット亂れ騒ぎあはや猪は丹波守殿へ飛び掛らん勢ひ故其時我れ〜兩人立ち現はれ大音上げ。」

大「ヲイ〜對手が猪じやアないか大音上げと云ふ奴がある者か。」

久「信州上田の城主松平伊賀守家來尾上久藏、中村大助是にありと
呼はつたり。」

大「ヲイ、猪に向つて呼はつたりと云ふ奴があるものか。」

久「此の時猪は兩名に向つて飛び掛らんなせし故心得たりと腰
に差したる一刀をスラリと抜いて猪の眞向目掛けて切り掛たり然る
に猪は體を變し左の方に繰り出すに南無三討ち損じたかと思ふ中再
び右の猪は猛つて我等を牙に掛んとしたる故心得たりと猪の脊
へヒラリと乗り移り遂々猪を兩名で其所へ退治ましてムいます。」
伊「ア、夫は適れの事である其の方等を侍分に取り立て得させる。」

とのお言葉故實に兩名は夢に夢見し心地とは此の事、喜こんだの喜
ばないのでは有りません若し淨瑠璃を語た事が知れては大變でござ
いますから頻りに是を隠して居りました其の後松平丹波守のお邸へ
兩名が罷り越して御禮を申上た時に丹波守様の御家來が

家「何故に淨瑠璃を語つたのに猪を討ち取つたと仰せられました。」

丹「夫はな確氷峠の話が出て伊賀殿は宜い家來をお持ちなされたと
いつた所から問ひ詰られて是非に及ばず猪を退治たと申たが却て
彼等の幸いになりて兩名が取り立られたと云ふが人間は謹んで口を
聞く可きもの心にもなく迂濶と確氷峠の彼事を思ひ出して宜い家來

をお持ちなされたといつた時に若し問い詰られた儘に淨瑠璃を語つたと云へば彼等は大方咎めでも受けるであらうに猪を退治たといつた許りで却て彼等の幸いになつた是につけても心得て口を聞く可きものである。」
と家來の者にお話がございましたが上に立つ人は猶更の事何人も口を聞には注意致すべき事でございます。

天 狗 問 答

野州日光山奥の院達谷の岩谷に山伏と水戸の黄門光圀卿が問答を致したといふ俗に天狗問答と申しまする講談之を一席言上致します
水戸の黄門光圀卿は中納言頼房卿の御次男で御座いまして御幼名を鶴千代丸様と申しました、十六才の時に御家督をお取り遊ばさせられて水戸中納言光國卿と申されました、十六才の時に御家督をお取り遊ばされ、六十四の時に御隠居、常陸國茨城郡太田郷西山へ隠遁遊ばされ、七十の御年にお忍びで奥州、出羽、越後を御巡見で御

座まいます、其その御お供ともを致いたした者ものは越えちご後の家か老らう山や田た左さ膳ぜん光みつ興おきといへる者ものを一人にんとも供つにお連つれ遊あそばされましたが此このもの者は越えちご後たかた高たか田たの城じやう主しゆまつ松たひら平ひら越えちご後の家か老らうで延えん寶ほうの九ねん年に越えちご後の騷さう動どう家か事じ不ふ取とり締しまりと云いふので一時じお家いへは改かい易えきに相あひ成なりました、其その主しゆか家を再さい興こうの爲ために行あん脚きやの僧そうに出いで立たつて水み戸とく黄わう門もん光みつ圀くわん卿きやうのお袖そでに絶すつて主しゆか家を再さい興こうに及およんだ此人このひとは松しやう雪せつ庵あん元げん起きと云いふ俳はい名みやうにて御おん供とも仕つかまは光みつ國くに卿きやうは北ほう條じやう五ご代だいの執しつ權けん相さう模も守しゆ時じ頼らいの例れいに倣ならひ國くに々くを御ご巡じゆん歴れきに及およばれて、奥あう州しゆうから出で羽は越えちご後の三さん國こくに遊いう歴れき遊あそばされ政せい事じ上やうは如いか何かであるかと云いふ恐おそれ多おほく將しやう家や軍ぐんの御ご後こう見けんを御ご勤とめ遊あそばされたるほどあつて斯かく御ご隱いん居きよなさ

れても政せい事じに御ご心しんを惱なまし玉たまひしは有あり難がたき事ことで御ご座ざいます、扱さも廻めぐり廻めぐて野や州しゆうの日に光くわう山ざんへ參まられました、此この山やまは勝しやう道だう上しやう人にんの開かい山ざんにして日に本ほん無む双さうの靈れい山ざんなり是こへ御ご參さん詣けい遊あそばされ、日に光くわう大たい谷た河が原はらの前まへに上かみ鉢はつ石いし、中なか鉢はつ石いし、下しも鉢はつ石いしと云いふ是こを鉢はつ石いし三さんヶま町ちやうと稱となへ其その上かみ鉢はつ石いしの清しみづ水みや屋や八やち藏ざうと云いふ家いへへ御お泊とまりて御ご座ざいます、時ときは元げん錄ろく十じゆ一いつ年ねん九くわ月がつ十じゆ一いつ日にち清しみづ水みや屋や八やち藏ざうと云いふのは、元もと中ちゆう禪ぜん寺じの剛がう力りきを致いたした者もので御ご座ざいます、夫それに由よつて此この者ものを案あん内ない者しやに頼たのみ、日に光くわう山ざんへ御ご參さん詣けい、先まづ七な瀑だ布ふ、含がん滿まんが淵ふち、弘こう法はふの投なげ筆ふで、化はけ地ち藏ざう等とう一いつ々く御ご覽らんになり、夫それより道みちを替かへて裏うら見みが瀧たきを初はめ七な瀧だきをば御ご覽らん、中なかにも華け嚴ごんの瀧たきは落おち口くちより

下迄七十五丈又た湖水は縦三里横一里半、斯る高山に水のあるのも一つの不思議と云ふ可きであります、是を御覽遊ばして、中禪寺へ御參詣、中禪寺の裏手の處ろに登山口と御座います是れは黒の衡門で御座います、檜の正目札が打ち付けて御座います、夫へ墨黒々と書いてある

- 一 男體山奥の院達谷の岩谷、大日如來禮拜の義は七月一日より七日の外、登山堅く停止たるべき事

當 山 執 事

とあり是れを黃門光國卿御覽遊ばされて

光是れ清水屋八藏七月一日より七日の外、他日登山停止とあるが某しは七十歳、人間の壽命は五十年、七十年は古來稀なりと申す、最早餘命も是れなき故、當山へ又と參詣もならざるにより奥の院達谷の岩屋へ參詣致さるは如何にも残念の至り此の山内取締りは満願寺の詰所に是れあるやうに承知致したが左様か

八御意に御座います、三十六坊筆頭満願寺に日光役人の詰所が御座います

光然らば夫に參つて登山の義を頼み入れたらば如何ぢや
ハ、どう御座いませうか先づ私しも中禪寺に剛力を勤めて居りまし

たが中々是は容易には免しますまい申し入れた處のが先づ無駄な事
で御座いませう

光イヤ神は非禮を受けず信心の者に昔より間違のあつた者はない
七月一日より七日の外參詣を免さんと云ふは甚だ不都合な事だ書面
を書くに由て是を役人の詰所へ持參に及べ是は輕少であるが使い賃
であるぞ

とお供の元起に仰せ付られたから元起は金子二百疋を清水屋八藏に
遣はされました、八藏喜こんで頓て満願寺の日光役人の詰所へ參り
まして申し入れましたところ早速に承知致すかと思いの外、以ての

外に役人は右の書面を披きもせず清水屋を呼んで

役何と心得て斯様な書附を持參に及んだ、勝道上人がお開きにな
られ七月一日より七日の外他日登山停止と云ふ事は其方も能く心得
て居るではないか成らん事を知り乍ら此の書面を持參すると云ふは
怪しからん事だ登山の義は罷り成らんから左様心得る手紙を持て立
ち歸へれ

清水屋は二分丈け叱られたから宜いと云ふ顔體で行うとすると
同役が

○夫なる書面に日光宮附役人へ、水戸西山とあるが、水戸西山と

云ふは前の中納言様の御隠居なされたお名前の様に承知致したが能く其手紙を披いて見た後ちに何とか挨拶をしたが宜らう

と其處で其書面を開いて見ると其の文に

一日光山奥の院達谷の岩屋大日如來に禮拜なさんとす、然るに

七月一日より七日の外他日登山停止たるべきよし、門主に乞ふ

て登山免許たるべき事

とあります、門主に乞ふて登山たるべき事とは通常の人の書くべき

事で御座いません

役「清水屋何人だ

八「お兩人りで御座います

役「人物は

八「一人りの年を老た方は丈の高い髭の眞白い一尺五六寸も御座い

ませうか眼がピカ／＼と光つて瞳が二つありますお供の方は色の黒

い頑丈な角力取り見たやうな坊さんであります、中々兩人とも立派

な方で御座います

役「さては前の中納言に違いない是は容易ならん、早速是へ案内し

る

と俄かに様子が變つたから清水屋も變に思い

八「此のお方は何で御座いませう

役「何だつて水戸の中納言様だ

八「エー水戸様、夫は大變だ二分返へさなければならぬ

と正直の奴で大きに驚ろいて是から其の清水屋が案内をいたして役

人十一名も宙を飛んで夫へ出迎へ中禪寺へ罷り越し一同の者は大地

へ兩手を突て御尊名を伺がひました所全く中納言光圀卿と分り夫か

ら中禪寺の本坊へ招待して種々馳走を致し愈々登山を免すと云ふ事

是から黄門様が清水屋を案内者にいたし元起と共に御登山に及ぶの

お話し

其二

清水屋八藏御供を致し禪定口の御門を開き男體山の奥の院へ御登

山で御座います、左右は三抱へも四抱へもあると云ふ杉の樹雲を貫

くばかり只一面に茂り石南花は紅白の花所々に咲き亂れ谷川の音凄

まじく慈悲心鳥の聲八方に響き雲霧朦朧として一間先きは分からぬ

程のこと元より御壯健の西山公に渡らせらるゝ故お杖を突き立てお

登りなされ此の時に御聲高く謠を歌い遊ばしたから清水屋八藏が

八「どうか其御謠はお止し遊ばすやうに

光「ナゼ

八「此處は日本に三つと云ふ靈山で御座いまして分けて當山は喧ましい山で御座いますからそんな大きなお聲を遊ばすと宜しく御座いませندうか大聲をばお出し遊ばさぬやうお願い申します

光「ウム聲を立ては悪いか

八「どうも悪うございます

光「何で悪い

八「それは貴公此の山は天狗様と云ふものが居りまして一寸大きな聲を出したり大きな聲で話をしたりなどすると參詣の者に怪我などが御座いますからどうか其の大きな聲で謠を遊ばすのはお止まりを

願ひます

光「ウム天狗と云ふ奴は繪に畫いても嘴が凸り脚絆をはいて飛んで歩るいてるあれか

八「そんな事を仰しやつて御覽じろ大變で御座います

光「あれは自由自在に飛んで歩行から酒屋の使などには至極宜からうな

八「左様なことを仰しやつては第一御案内をいたします清水屋が先きに遣られますから私しを助けると思つてどうぞそんなことを仰しやらんやうにお願い申します

光「どうも愚な奴は仕様がないな富士へ登る時に先達と云ふものがあつて南無と云ふではないか御山晴天で御座ーい、六混清浄と掛け念佛と云ふ者で聲を掛ながら登山をするこりや何の爲に大きな聲を出すのかと云ふにあれば山氣を避ける爲山氣朦朧として聲を發しなれば甚だ身體に害をなす者夫れ故掛け念佛は予はやれんによつて謠を歌うのであるから心配をするな

八「へーエ恐れ入りましたして御座いますが成り丈け小さなお聲で願います

と是より又道の程二十七八丁もお登りに相成りますと、大きな岩が

あります其の岩が丁度腰掛臺には頃合で御座います故夫れへお腰をお掛け遊ばして四方の景色を見て居らせられたが頓て腰より取り出だしたる一瓢の御酒を召し上がりましてお供の元起にも下され

光「元起、八藏にも一盞を取せる

八藏は眞青になりまして

八「之れはしたり私しはお腰に付て居るのは水かと存じて居りました此のお山で酒を呑んでは大變で御座います

光「何ぞと云ふと足下は大變だ〜と云ふが酒と云ふものは寒さを凌ぎ暑さを避け悪るい病を幾分か避けるを以て之を酒と云ふ君子も

之れを指して天の美祿と云ふ佛はこれを盤若湯と云ふ聊さか呑めば
 氣血遁環いたす、古今の靈藥度を過すによつて害をなす又た山氣を
 避けるには是上の物だ、貴様などは何にも知らん者だから只天狗と
 云ふ奴めが來つて害をなすと云ふ夫れ計り恐れて居るから困る予に
 隨がつて參る中は心配をするなと又もや道の程十七八丁お登りに相
 成りますと、天狗の岩橋と云ふものが御座います、是を馬の脊越と
 申して自然石と自然石が向ふから半分此方から半分夫がかち合つて
 自然に橋になつて居ります下は何十丈ともない谷川でありまして能
 く睨を定めて見ると遙か下に水の流れが見へます實に物凄でいとこ

ろの岩橋で御座います、清水屋八藏其の岩橋へ指を指しまして

八旦那樣七月一日より七日の間だは此橋の左右へ足代がかゝりま
 す夫故に登山をいたしても大丈夫で御座いますが平常は足代がかゝ
 りませんから登山を免しませんによつて七月八日の日にはお清めの
 雨と云ふが降り一晚の中に此の足代をば取り除けまして御座います
 此の先に古峯ヶ原と申する所ろが御座います其所に前鬼隼人と云ふ
 人が居ります其の家の前にズット材木で足代をば積み上げます、夫
 故御登山の義はおあぶなう御座いますからお止し遊ばした方が宜し
 う御座い升アノ向ふに見へますのが達谷の岩屋で御座います彼の中

に大日如來が安置して御座います故之れで御禮拜を遊ばして御下山
になりますれば日のある中に中禪寺までお着しに相成ります故どう
か之れよりお歸へりの程を願いたいもので御座います

光「コレ清水屋折角門主に乞ふて登山口の開門を致して貰らい之れ
迄參つて大日如來を禮拜せずにと下ると云ふは如何にも残念、予も今
年七十歳餘命がないによつて又と登山をすると云ふ譯にも參るまい
夫も平地なれば兎も角も勘る高山なれば甚だ通行も難義いたすから
馬の脊越を越へて達谷の岩屋へ罷り越すであらう、元起手鼓を打て

元ハツ

ポーンポーンと手拍子で御座いまして鼓の眞似をいたしますと西山
公半眼に見開き丹田に力を入れ御橋掛りから能舞臺にお進みになる
やうにスサリくと馬の脊越へお掛りに相成りまして

光「是は常陸より出でたる僧にて候、下野國男體山の奥の院達谷の
岩屋大日如來を拜さばやと存じ尋ね候なり實に恐ろしの山又山の重
なりて

と謠いの調子でスサリくとお出でになりましたから向ふへヒラリ
ツとお越しになりましたして

光「サア元起橋を渡れ

と云ふ御意元起元より眞影流の達人なれば劍法の氣合で體を躍らし
て足を止めの體を開いて又もや向ふへ飛ばれし故忽ちヒラリと向ふの
岸へ移りました實に義經が八艘をお越しになつたるも斯やとばかり
思はれました其の跡に残つた清水屋八藏渡らうとすると眼が暗んで
何分にも前へ進めません足の裏がムヅ／＼痒くなりどうしても越ゆ
る事が出来ませんこれ世に云ふ神經で御座います、精神に谷へ落ち
はせんかと云ふ念がございますから目が暗んでしまい足も進みませ
ん疊の縁と思へば飛んだり踊つたりしても渡れるから其の積りで眞
直に行ばどんな高かい處ろでも渡れんと云ふことはありませんが其

處は精神の落ち付かん者だと怖いと云ふ念があつてどうしても渡れ
ません八藏はどうする事も出来ませんから橋にベツタリ四つん這い
になつて夫から段々這い出して行きますから
光夫なれば慥かだ清水屋旨の事を工風したネ一つワン／＼と吠へ
て見ろ

ハ、どうも茲でさう笑はせちやア困ります
と漸々の事で岩橋を越へまして間もなく夫より達谷の岩屋で御座い
ます之れに禮拜を遂げましたがどうも其の晩はゴーツゴーツと云ふ山
中の荒夥だしく清水屋八藏は更に生たる心地もなし程なく夜も明け

まして風も止み雨も晴れ一點の雲もなく東より太陽の高昇り稍く
より致してポタリくと雫の滴たりまする風情何とも物に譬へん方
もなく四方に鳥の聲聞へ實に晴々といたします、之れより御下山で
御座います、再び元の如く岩橋を越へましたが登山の時には氣が付
ませんで御座いましたが下山の時お心付きに成りましたは大いなる
自然石にこりばと彫付けてあります、其の左右は岩石岬々として四
方に熊笹が生い茂り其の岩の間にドウドーツと云ふ谷川の流れ絹の
白き糸を晒せるが如し、光圀卿は何思ひけん召されたる草鞋を其の
中に差し入れて洗はうと致しました故清水屋八藏驚るいて

八「貴公夫んな汚ないお草鞋を垢離場の水でお洗いになりますと忽
ち天狗様が来てお怒りになります

光「よく貴様は天狗くと云ふが天狗と云ふ奴は鳥鳶の化たのだ
鳥の化たのが鳥天狗鳶の化たのが鳶天狗と申すのぢや

八「鳶の化たのでエなアありやアしません

光「マアさう驚ろくな草鞋を洗らうのが悪いか

八「大悪で御座います

光「ナゼ

八「なせと云つたつて不浄を浄める所ろで皆んな登山の時に垢離を

取りまして達谷の岩屋へ参りますので、其所で草鞋をお洗いなさる
と云ふは怪しからん事で

光「夫だから貴様等は分らんと云ふのぢや垢離と云ふ文字はな何と
書くか知つてるか垢に離れると書いて垢離と讀む眼から出れば涙鼻
から出れば鼻口から出れば痰唾下かつて大便小便之れ五體の垢小便
なれば大地になし置かば天日に乾はいて砂に混じ風の爲に八方に吹
き散り眼中に入り口に入る此の上もない不淨ならずや豈しや小便な
ればとて男體の川へ致す時は三尺離れて清水に歸す垢離と云ふ事を
汝は無學文盲で分らんから予を尤むるが少しも差支へないものだ

と仰しやつて草鞋を充分お洗いお立上りになると此の時一陣の風サ
ツと吹き起り前なる岩の上にヌツクと現はれたる一人の山伏丈の高
さは彼是八尺もあらん兩眼の光ること明星の如く眉間に十二のひだ
打たる兜巾を戴き柿の衣に鈴懸の輪袈裟八角の金剛杖をばかい込ん
で紫折の太刀を携へたる其の勢いは實に大魔王の荒れたるが如くハ
ツタと目眼んで突立たり清水屋之れを見るや否やペチャクリと腰が
脱けて仕舞つた

ハ「夫だから私しと言はないこつちやアないとう〜天狗様が出て
お仕舞なされました

光國卿お笑いなされて

光そも汝は何者なるぞ

山伏は聲高く

山吾は當山守護の靈神なり汝凡俗でありながら勝道上人の開かれ

たる日本一の靈山、一山五名と云て山一つに五つの名あり男體山、

日光山、二光山、黒髮山、大まなこ坏云へる所の此靈山へ山意を犯

して登をなし擅まゝに酒を呑み高聲を發して往來なし其暴行物に

譬へん方もなく一棒の本に打ち据へ可き者なれども聊か是れ迄善事

を働らさし故命は助け遣はすなり疾々下山致さばよし遅々すれば此

の棒の爲に汝が素首を打ち碎かん

と其の聲宛然雷の如し清水屋八藏は生たる心地もなく大地へひれ伏

し身を振はせて控へたり、御傍らにあつたる所の松雪庵元起萬一

君の身體に害を致す其の時には一刀の元に切り棄てんと用意の小劍

の柄へ手を掛け身構へたり光國卿は更に動する氣色もなく山伏を御

覽なされて莞爾と笑ひ

光汝當山守護の靈神と申さるか

山如何にも

光さらば我がいふ事を能く聞かれよ、予が登山の時に來つて咎め

る。は當山守護の靈神なり、今下山の時に來つて之を咎めるは汝何れへか至つて守りの役を怠たりしぞ其罪免るべからず、茲に一ツの關門あり旅人來つて度々訪づるゝと雖ども更に一言の答へなく、旅人道を急ぐが故に遂に其の關を越ゆ、其時役人周章しく駈來つて旅人を捕へて關所破りの大罪人と咎めなば如何に、之れ關を越へたる旅人の科なるや守りを怠たつたる罪にあらずや、汝之に答へあらば承はらん如何に〜

と問ひ詰られ山伏ハツト言葉に窮し差俯向ひて答へなし、此時西山公は大言揚げ

光「天地の恵みを受けて世の中に生れ出でしを同胞と知れ、天地の恵みをうけて世の中に生れ出でしは、らからと知れ」と大音に御呼ばり遊ばさるゝと突然颯と吹來る風と共に彼の山伏は消へて跡なくなりにけり、清水屋八藏ホツと息をついで

八「貴所様は天狗様よりゑらい天狗除の御咀咒が御上手で入らつしやいます

と賞めましたが水戸黄門光國卿が天狗を退ぞけたといふ是を世に日山産谷岩屋天狗問答と申升

へる者ありとも云ひ、無しとも云ひて未だ其の説の

聞かされども或は唐土の仙人といへるが如きに類したる
 者ならんといふ説も御座い升、其の古へ西行法師が若狭の小濱街
 道を通行の節白髪だらけの老人が小濱へは是を行きて宜しきやと
 聞きました、並々の人なりせば左様で御座い升之を真直にお出で
 なされば小濱へ出ますると答ふべきを、兎角歌人などいへる者は
 何に就けても歌を詠みたがる者ゆる西行が老人に向つて「白雪を
 いたいきながら若狭とは死出の山路を問へば問へかし」といふと
 右の老人振返つて莞爾り笑ひ「白雪を戴だけばこそ問ひもせめ若
 狭に歸る路を知らねば」と答へたるまゝ、西行が後ろを振向く間に

老人の姿は見えなくなつたと申す、之れ唐土の仙人、日本の天狗
 などいへる者にはあらざりしか、されば西山公が日光山に於て問
 答を爲せし山伏といふも即ち天狗ふ稱ふる者ならんと申傳へて
 こそ之を天狗問答と題しました次第で御座います

266

少年武士道



不許複製

發行所

東京市淺草區
猿屋町十七番地

國華堂書店

講演者

初代

桃川如燕

編輯者

東京市淺草區猿屋町十七番地
山崎曉三郎

印刷所

東京市淺草區福井町一丁目二番地
岩見米三郎

四年四月十二日發行

定價金貳拾五錢
郵税金四錢





